

東京音楽大学附属民族音楽研究所刊行物リポジトリ

Title	ルーマニアにおけるパンフルートの歴史～ 18世紀からの民族楽器ナイとしての歩み～
Title in another language	A History of Pan flute in Romania–Development of <i>Nai</i> as a Folk Instrument since the 18th Century–
Author(s)	櫻岡史子 (SAKURAOKA Fumiko)
Citation	伝統と創造=Dento to Sozo, Vol. 11, p. 25-34
Date of issue	2022-03-29
ISSN & ISSN-L	Print edition: ISSN 2189-2350, Online edition: ISSN 2189-2482, ISSN-L 2189-2350
URL	https://tcm-minken.jp/publication/IE_B11202103.pdf

ルーマニアにおけるパンフルートの歴史 ～ 18世紀からの民族楽器ナイとしての歩み～

A History of Pan flute in Romania -Development of *Nai* as a Folk Instrument since the 18th Century-

櫻岡史子 SAKURAOKA Fumiko

パンフルートの歴史は、古代ギリシャ時代に遡る。ギリシャ神話の中に登場する牧神パンが吹いていたとされる楽器だ。様々な形状のパンパイプを世界各国で見ることができるが、ルーマニアでは民族楽器「ナイ」として演奏されてきた。ヨーロッパでは長く忘れ去られていたパンフルートが、ルーマニアでどのように民俗楽器「ナイ」として認識されていったのか、18世紀からの歴史に焦点を当てて紐解いていく。

キーワード: パンフルート Pan flute、パンフルート奏者 Pan flutist、
ルーマニア Romania、ゲオルゲ・ザンフィル Gheorghe Zamfir

1. はじめに

パンフルートは世界最古の管楽器の一つと言われ、歴史は古代ギリシャ時代にまで遡る。ギリシャ神話の中に登場する牧神パンが吹いていたとされる楽器だ。様々な形状のパンパイプがヨーロッパ、南米、アフリカ、アジアを始め世界中に存在するが、ルーマニアでは、民族楽器「ナイ」として演奏されてきた。

1950年代、当時のルーマニア政府は、学生達が民俗音楽を学び、民族意識を高めることを望んでおり、文化庁によってルーマニアのパンフルート奏者ファニカ・ルカ Fania Luca が、ブカレスト音楽院に招聘され、学生たちにパンフルート奏法を伝えた。本格的にナイの教育活動が始まったのである音楽院の最初の生徒には、ゲオルゲ・ザンフィル Gheorghe Zamfir、ニコレ・ピルヴュー Nicolae Pirvu、ラドゥ・シミオン Radu Simion、ラドゥー・コンスタンティン Radu Constantin などがいる。

1970年代に、パンフルートの巨匠であるゲオルゲ・ザンフィルの演奏をきっかけに広く世界に知られるようになった。現在では、ブカレスト国立音楽大学の学部・大学院課程にパンフルート科が創設され、多くの奏者を輩出している。パンフルートは民俗音楽にとどまらず、クラシック、ジャズ、ロック、ポップスなど演奏の幅を広げており、楽器としての地位を確立してきた。世界には様々なパンパイプが存在するが、ルーマニアでは独自の発展を遂げ、高い演奏技術と他の楽器と同等の演奏を可能とした民俗楽器「ナイ」は、どのようにルーマニアの楽器として根付いていったのか、18世紀からの民俗楽器としての歩みを考察する。



写真提供：ゲオルゲ・ザンフィル氏



写真提供：ゲオルゲ・ザンフィルオフィス

2. 18世紀におけるパンフルートの登場

18世紀に入りパンフルートが初めて文献に登場するのは1726年のことである。ギリシャ出身の2番目の王子グリゴリエ・ギガ・ボード Grigorie-voda は、オスマン帝国のスルターンよりモルドバの国を統治する許しを得て、イスタンブールよりモルドバの地にやってきた。2人の史官とティンバロン奏者とナイ奏者、銃を打つ人と一緒にプルト川に上がりやってきたのである。[Neculce 1726: 283] これらのことから、現在のトルコからパンフルートが持ち込まれた可能性があることが推測できる。

1733年には、王様は、休日には、いつもロマの音楽家であるラウタリと遊んで過ごし、そのラウタリはパンフルートを演奏していた[Neculce 1726: 297]とある。宮廷で娯楽を提供するために雇われ、王侯貴族を中心にラウタリの音楽が浸透していたことが伺えるのである。

フランス人ジャーナリストのジャン・ルイス・カラ CARRA はモルドバ、ワラキアを訪れ、ロマが楽譜を見ることなく、耳で聞いた音を演奏している姿を目にしている。ヴァイオリン、フルイエル、そして8管の穴が開いているフルートを唇の下に置き、左右に動かしながら演奏している。この3つの楽器は国の楽器である[Carra 1777: 176]と述べている。パンフルートの名前は出てきていないが、これは、パンフルート以外にみられない奏法であり、形状であると言える。王侯貴族にとどまらず、庶民の間でも国の楽器として認識されていた可能性はある。

歴史家のフランツ・ヨーゼフ・シュルツェル Franz Josef Sulzer は、1774年と1776年に、ワラキアの地を旅してパンフルートの演奏を聴いている。モルドバとワラキアのラウタリが使用した楽器は、ヴァイオリンと7管のフルート パンフルート は、ムスカル(ペルシャ語)とシリングパノス(ラテン語) [Sulzer 1781: 417,419]と記載されている。パンフルートを2つの名前で呼んでいる点は大変興味深い。当時聴いた曲の譜面が残されており、場面にパンフルートが登場しているため、演奏された可能性が極めて高い。1700年代にどのような音楽を演奏していたかを知ることが出来る貴重な資料である。



写真提供：ルーマニア国立図書館

3. ラウタリとダンスの教会壁画

1787年に建設されたワラキアのロマナス県(現:オルテニア)にある教会には、とても珍しい壁画が残されている。洗礼者ヨハネを殺害した時の場面が描かれており、ラウタリである2人のヴァイオリン奏者とナイ奏者が演奏する姿が描かれている [Bobulescu 1940: 61]。

この壁画は、ルーマニアには一つしかない貴重なものである。

ロシア在住であったフランス人アレクサンドル・デ・ランジェロ Alexandru de Langeron (1765-1831)によると 1791年にロシアの観光客がモルドバとムンテニアを訪れた際に、教会でロマの演奏を聴いている。ヴィオラ、ヴァイオリン、そしてパンフルートを演奏しており、8管のパイプで唇の下に置いてある楽器を使用して演奏している。教会で演奏しているロマ達は観客を満足させていた [Bezviconi 1947: 154] と述べている。当時、教会の壁画としてパンフルートが描かれ、教会で演奏するほどラウタリの人気が高かったと考えられる。



Fig. 34. — Două lăutari unul cu vioara și altul cu naiul, cântă la masa lui Irod, pe când Salomeia aduce capul Sfântului Ioan Botezătorul. Pictură din 1787²⁾, din biserică satului Ostrov, comuna Greci județul Romanșaj.

写真提供：ルーマニア国立図書館

4. 王侯貴族達に愛されたパンフルート

18世紀から19世紀にかけて貴族達は挙ってロマの音楽家達を雇い娯楽として楽しんでいた。旅行記やジャーナリズムで有名な貴族のディニク・ゴレスク Dinicu Golescu (1777-1830) は、新しいもの好きであった。ルーマニアの音楽学校を作り、12名のロマ音楽家を雇っていた [Lahovari 1898: 742] のである。ルミニク出身の貴族のアレク・ニクレスク Aleci Niculesc は、6名のロマの音楽家を雇い、そのうちの3人はギタリスト、2名のギタリストは首からムスカル(パンフルート)とナイ(パンフルート)を下げて演奏していたのである。1名はマンドリンを弾きながら、フルィエルデパンを吹いており、6人目は手でツィンバロンと口でナイ、でドラムを叩いていた [Lahovari 1898: 742] とある。

ここで初めてフルィエルデパンという呼び名が登場するのも興味深い。パンフルートに関する名前が3つ登場している。貴族達に愛されたロマの音楽家は、一人で様々な楽器を同時に演奏していたことが分かる。

ギョルゲ・ブラタ Teodor T. Burada によれば、1837年にデミドフ D.A Demidoff がワラキアを旅行した際に、ワラキア公国の国王の宮殿に招かれた。昼食を食べた時にラウタリの音楽家達が演奏しており、コブザ、ヴァイオリン、ナイ、トランペットを演奏していた。同年、モルドバを旅した際に、モルドバで演奏していたのは、ヤシ市に住むラウタリの音楽家のバルブ・ラウタル Barbu Lăutaru とアンゲルツァである。19世紀の初めに活躍しており、その中で最も有名だったのがバルブ・ラウタルだった [Burada 1974: 55]。彼は、コブザ、ヴィオラ、そしてナイも演奏しており、ナイを演奏している場面を描いた絵が残されている。



写真：バルブ・ラウタル
写真提供：ルーマニア国立図書館

5-1. 19世紀におけるパンフルートの演奏

19世紀におけるパンフルートは、海外からの旅行者によって様々な場面で記録されており、ラウタリの演奏によって発展してきたことが分かる。歴史学者であるディオニシエ・ファティノ Dionisie Fotino によると、1810年にペルシャからフランスの皇帝ナポレオン・ボナパルトへの使者使者は、ペルシャからフランスへ渡り、その後、ワラキアを訪れ滞在した。そこで、ロマのパンフルートの演奏を耳にして驚いた。ペルシャ人より演奏が上手である [Fotino 1859: 239] と述べている。このことから当時、少なくともペルシャの奏者よりもワラキアの奏者の演奏レベルが高かったと考えられる。

1820年に、フランス人のコムテデ・ラガルデ Comte de Lagarde は、モスクワからイスタンブール、ブカレスト、シビウを経由してウィーンへ旅をした。そこで演奏されていた音楽は、ギリシャ音楽と似ている [Comte de Lagarde 1824: 360] と述べている。歴史学者であるミハイ・コガルミチャーノ Michel de Kogalnitshan は、初めてナイとムスカルを別々に記載し、別々の楽器と述べている。ロマが使用した楽器はヴァイオリン、コブザ、フルート・デ・パンがナイ、そしてタンバリン、ムスカルがシリックス [Michel 1837: 16] とある。パンフルートについてここでは、18世紀と異なる2つの名前が登場している。モルドバとワラキア地域によって呼び方が異なっていた可能性や別々の楽器として認識されていた可能性も否定できない。

ドイツ人のポール・コルンバ Paul Kornbach は、1842年にモルドバを旅して、当時のラウタリの活躍を記録している。ラウタリは音楽協会を設立し、好きな楽器はヴィオラ、コブザ、ナイで、夜も昼も一年中歌っていた。ロマの中でラウタリの身分は高かった。イタリアとドイツ、フランスでも知られており、彼らは一番良い作曲家で演奏家であると述べている。学校には行かず、耳で聞いてすぐに演奏することが出来た [Busa 2009(2004): 283, 557]。ラウタリの演奏は、海外からも注目されていたことが伺える。

シャウルス・ドゥウゾールト Charles Doussault は、1843年にモルドバとワラキアを訪れ、国王ギョルゲ・ビベスク Gheorghe Bibescu に謁見した。ブカレストの生活について、昔から現在まで人々は日曜日になると踊りを踊る習慣があり、踊りのオーケストラには、ナイとヴァイオリン、2名のロマによって演奏されていた。

ジャン・ヘンリー・ウビチニ Jean Henri Abodolonyme Ubiconi によると、1846年のロマオーケストラは、ヴィオラ、ナイ、コブザで演奏しており、リーダーはヴァイオリニストである。ナイは高音域や哀愁漂う音色を鳴らし、いつもヴァイオリンと一緒に演奏されている。[Busa 2010(2004): 144] ラウタリによって演奏されたナイは、19世紀には、宮廷での娯楽にとどまらず、それぞれ地域に定着し、人々の暮らしをより豊かなものにしていたのである。

5-2. 地域に根ざしたラウタリとパンフルート奏者の活躍

1854年にフランス人のアルフォード・ポイショネ Alfred Poissonnier は、ブカレストを旅した。ワラキアとモルドバには、多くのラウタリ達が活躍しており、彼らは結婚式や家族のパーティーに招かれたのである。彼らの音楽は、心の痛みを忘れさせる。ルーマニア

のバラダを思い出させる。バラダはルーマニアの魂である。ラウタリ達はルーマニアの先祖達に思いをはせ、誇りを感じている。それはラウタリの楽器であるナイとコブザ、ヴィオラで演奏されている [Busa 2010(2004): 155,344]。ラウタリの音楽家達は、それぞれの地域に移り住み、演奏を行い、地元の有名人になったのである。例えば、ボウリヤン Boulean、イオニカ Ionica、ドミトラキエ Dumitrache、オキアルビ Ochialbi がブカレストでは人気があった。



絵画：タラフ オキアルビ Ochialbi
ナイ奏者：アンゲルシュ・ディニク
Angelis Dinicu
提供：ルーマニア国立図書館

同じく 1854 年に初めてナイ奏者の名前が登場する。その名はアナスタンセ Anastanse (Muscalagiul) である。アナスタンセは、天才的でとても愛されていた [Busa 2010(2004): 351]。と述べられている。今までラウタリの演奏で用いられてきたナイは、あくまでもヴァイオリンなどの伴奏楽器としての役割を担っていたが、19 世紀に入ってナイ奏者に対する注目が高まっていることが伺える。

6. パリ万博博覧会におけるパンフルート奏者

ラウタリはルーマニアの展示委員会によってパリに持ち込まれ、シャン・ド・マルスの国家委員によって設置されたステージで毎日、毎晩演奏している。オリジナリティに溢れた演奏によって観客を魅了する。パリ万博のルーマニアのステージでは、非常に可愛い若いルーマニア人の女の子が手刺繍の伝統的な民族衣装を着用していた。その素晴らしい民族衣装はルーマニアの独特の美しさをさらに高め、小さな特別な楽しみを観客に与えたのである。

1889 年のパリ万博で、ルーマニアのラウタリの音楽家達が演奏し、2 名のナイ奏者が金銀メダルを獲得した。金銀メダルを獲得した奏者は、アンゲルシュ・ディニク Angelis Dinicu とクラチュネスク Cracou Nescu である [Bibesco 1890: 171]。この二人の奏者のメダル獲得は、世界各国やルーマニアの人々に自国の民俗楽器であると印象づける機会となったのである。そしてナイがソロの楽器としての地位を築ききっかけとなったと考えられる。

フランスの新聞『ル・フィガロ』Le Figaro によれば、1889 年までは、ハンガリーのチガーニ(ラウタリ)が人気だったが、パリの万博をきっかけにルーマニアのラウタリの人気が



写真：アンゲルシュ・ディニク
写真提供：ルーマニア国立図書館



写真：パドウラニウ・クラチュネスク

高まった。1889年5月10日の記事には、昨日そこにはラウタリの音楽家達が16人いて、ヴァイオリン、他の弦楽器、ナイを演奏している。2つか3つの例外を除いて、音符を知っている者は一人もいなかったが、彼らは1時間以上にわたり、私達を魅了したとある。並外れた音楽家たちは自国で人気の様々な曲を演奏し、その後、いくつかのウィーンのワルツとパンフルートのためにアレンジされた《リゴレット》によるロマンスをソロで演奏した。彼らは驚くべき表現とニュアンスで演奏しており、彼らのリズムはハンガリーのチガーニよりリズムが固定されており、彼らの演奏は妙技に欠けていない。ナイでアリアを演奏したソリストは、真の芸術家であると絶賛している。



絵画：1889年パリ万博の様子 提供：国立フランス図書館

7. エリザベタ女王（カルメン・シルバ）からの支援

フランスの新聞 Le Parisien では、1889年5月12日に「パリの外国人」と題した記事が掲載され「束ねて留めた葦で遊ぶ奇妙な芸術家であるルーマニアのラウタリは、チガーニ

を倒すことを予想できる。チガーニには、今まで次から次へと多くの演奏会の依頼が舞い込んだ。私達の変化する国では、ハンガリー人が新しい名人（ルーマニアのラウタリ）に道を譲っているのは当然だ」と述べられている。このラウタリの人気を後押しした人物にルーマニアのエリザベタ女王がいる。

ルーマニアのエリザベタ女王は、ジャーナリスト、エドゥアール・ハーヴェ Edouard Herve の夫人の夕方のパーティーに招待された。パーティーでは、チガーニとラウタリの音楽のどちらが良いか投票を行った。そこで、全一致でラウタリが勝利した。ラウタリの音楽家達は、エリザベタ女王によって暖かく推薦されたのである。



写真：エリザベタ女王
提供：ルーマニア国立図書館

8. パンフルート演奏の広がり と 奏者の躍進

1889年のパリ万博をきっかけにパンフルートの演奏は広がり、ナイ奏者達は活躍した。フランソア・バゼン Francois Bazin が作曲した新しいオペラ《LE VOYAGE EN CHINE》が上映された。オペラの幕間でラウタリが演奏していた。ディニク・チョラクのラウタリの中で、アンゲルシュ・ディニクがナイのソロ演奏で登場している。演奏曲は、ワルツやポルカなど、フランス人が好む曲を演奏している [L'Union liberale 1891]。当時、フランスではオペラの幕間で演奏されるほど、人気を博していたことが分かる。

フランスのサーカスでもラウタリが演奏している。ナイ奏者は、1889年のパリ万博で演奏し、金銀メダルを獲得したパドゥラニユ・クラチュネスクである。演奏に使用したナイは、15管でカーブしている [Le Petit Troyen: 1890] と述べられている。当時、すでに2オクターブの演奏を加納とする楽器を使用していたことも分かる。

9. おわりに

ルーマニアの民族楽器である「ナイ」については、18世紀からどのように民俗楽器として根付いていったか、今まで明らかにされてこなかった。今回の研究によって、王侯貴族の娯楽として愛され、その後、地域の中でもラウタリの楽器として広く演奏されてきたことが分かった。18世紀の前半から、すでに他国と比較しても高い演奏技術を持っており、外国からの多くの旅行者が目にしてきた。1854年には、初めてナイ奏者の名前、アナスタンセ Anastanse (Muscalagiul) の登場がある。少なくとも1850年代には、ナイ奏者の演奏が注目されていることが分かる。高音域や哀愁漂う音色を演奏し、伴奏楽器として役割を担ってきた楽器が人々を魅了し、徐々に伴奏楽器からソロ楽器として活躍するようになったのである。1889年のパリ万博でのナイ奏者の金銀賞の獲得をきっかけに人気が高まり、様々な場所で演奏されたのだ。1890年には、民俗音楽にとどまらず、オペラの幕間でクラシックでも演奏されていた点は、大変興味深い。また、ルーマニアの女王エリザベタの存在がナイの人気を後押ししていたことも明らかになった。パンフルートに関する3つの名前が登場しており、それぞれが別々の楽器として述べられている。楽器は、ワラキヤ、モルドバを中心に発展してきたが、地域によって異なる呼び方があったか、あるいは別々の楽器である可能性も否定できない。今後、明らかにしていく必要がある。最も古い歴史があるとされる楽器の一つであるパンフルートは、古代より変わることのない風の音色である。奏者達の活躍により、演奏の幅を広げ、民俗音楽の枠を超えて、今日様々なジャンルで演奏されている。新しい演奏法が生まれ、まさに今、新しい歴史を築いている楽器といえる。今後のパンフルートの楽器としての活躍を期待したい。最後に外務省のコーネリア先生にご助言を頂いたことに心より感謝を申し上げる。

参考文献：

Bezviconi, Gheorghe G.

1947 Călători ruși în Moldova și Muntenia. (București).

Bibesco, George (Prince).

1890 Exposition universelle 1889 - La Roumanie avant-pendant-après. (Paris).

Bobulescu, C..

1940 Lăutari și Hori în Pictura Biseriilor Noastre. (Tip. Nationala Jean Ionescu & Company).

Burada, Teodor T.

1974 Opere. (Editura Muzicală a Uniunii Compozitorilor București).

Busa, Daniela.

2009 (2004) Călători străini despre Țările Române în secolul al XIX-lea. Vol.5. (Editura Academiei Romane, București).

2010 (2004) Călători străini despre Țările Române în secolul al XIX-lea. Vol.6. (Editura Academiei Romane, București).

Carra, Jean-Louis.

1777 Histoire de la Moldavie et de la Valachie. (A Jassy).

Comte de Lagarde.

1824 Voyage de Moscou à Vienne: Par Kiow, Odessa, Constantinople, Bucharest et Hermanstadt, ou Lettres Adressées a Jules Griffith (Classic Reprint). (Paris).

Fotino, Dionisiu.

1859 Istoria Generala a Daciei. (București).

L`Union liberale.

1891 Le Voyage En Chine. L`Union liberale. (14 February 1891).

Lahovari, Ioan George.

1898 Marele dicționar geografic al României. (București).

Le Figaro.

1889 A Travers Paris. Le Figaro, (10 May 1889).

Le Parisiene.

1889 Les Etrangers a Paris. Le Parisiene. (12 May 1889).

Le Petit Troyen.

1890 Cirque. Le Petit Troyen. (1 November 1890).

Michel de Kogalnitchan.

1837 Esquisse sur l`histoire, les moeurs et la langue des Cigains. (Berlin).

Neculce, Ion.

1726 Letopisețul Țării Moldovei. (București).

Sulzer, Franz Josef.

1781 Reisen Sie und hören Sie die Panflöte der Walachei. (Rudolph Gräffer).

The history of the pan flute dates back to the ancient Greek era. This is the musical instrument the Pan in Greek mythology is said to have played.

Pan pipes of various shapes can be seen all over the world, but in Romania they have been played as a folk instrument "Nai". Focusing on its history from the 18th century, this research note will unravel the way the pan flute was recognized as the folk instrument "Nai" in Romania., although it has long been forgotten in Europe.

(本学付属民族音楽研究所講師 日本ルーマニアパンフルート協会会長 パンフルート)